

Title	『新可笑記』における〈眼〉の機能
Author(s)	仲, 沙織
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2016, 50, p. 49-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70034
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『新可笑記』における〈眼〉の機能

仲 沙 織

キーワード…近世文学／西鶴／新可笑記

はじめに

元禄元年（二六八八）十一月に刊行された『新可笑記』は貞享末年から元禄初年にわたる多作期の西鶴浮世草子の一作であり、「西鶴の小説のうち出来の悪いと見られてゐるものの中でも『新可笑記』はその底辺に属する」⁽¹⁾と評されてきた。その理由は、作品の不統一性に求められるだろう。

『男色大鑑』の前半部（巻一―四）、『武道伝来記』、『武家義理物語』と展開して来た武家説話集の後をうけて書かれた本書は、男色・敵討・義理といった素材で統一しようとする志向がまったくみられず、すこぶる雑纂的であると同時に、奇談・珍談としての面白さを追う事が中心となる。約半数の作品が、事件解決のための推理や明

察・明断を見所にする点、翌年刊の『本朝桜陰比事』の先駆けとなるものとして注目されるが、全体としては、やや雑然とした武家説話集といった印象をまぬがれがたく、西鶴作品中での評価は高いものではない。⁽²⁾

また、『新可笑記』は他の西鶴浮世草子作品に収録されなかった話を集めた作品集と捉えられる傾向にあった。

「新可笑記」は、ひどくいへば彼が「男色大鑑」以来蒐集した武家に関する説話を、それぞれのテーマにしたがつて処理したあとに残つたものの中で、その説話的興味において捨てがたいものを整理して刊行した雑編である。⁽³⁾

町人を裁く話は、もとく『本朝桜陰比事』に入れるべきものであつたであらう。武士の治世と士官と日常生活に関する話は、さして多くのものを集められなかつたために、懐硯・武道伝来記・武家義理物語など旧作から洩れたものを拾ひあげたものもあつたであらう。⁽⁴⁾

確かに、同じ武家物の『武道伝来記』や『武家義理物語』と比較すると、『新可笑記』には一見して「敵討」や「義理」といった共通の素材がなく、統一性に乏しいと言わざるをえない。

一方、杉本好伸氏は「『新可笑記』の作品構成―各章間における相互関連の検証を中心に―」⁽⁵⁾をはじめとした一連の論考⁽⁶⁾において、詳細な作品分析をもつて、「話のモチーフやプロット、話中の題材・素材や表現・用語といった諸々の観点から、話と話との間に見られる関連性を検討し」⁽⁷⁾、各章間における相互の関連性を論じた。また、『新可笑

記「全体については、作品前半に〈二人話〉、後半には〈三人話〉が集中することなどから「作品全体を覆う〈構成意識〉」の存在を指摘した。これらは従来「相互に関連を持たず」「すこぶる雑纂的」とされてきた『新可笑記』について、構成意識の存在を指摘したという点で、画期的であった。しかし、杉本氏が数々取り上げた関連性については、五巻からなる『新可笑記』全ての巻に跨がるものが存在しないという問題がある。

さて、『新可笑記』は次の一話で始まる。

巻一の一「理非の命勝負」梗概

九州の国主のもとで二人の美童が舞い踊り、衆目が夢中になっていた際に、御納戸から金子五百両が紛失した。神道の行者橋の正連は、人々に明徳門を潜らせ人相を見て犯人を指摘した。その侍は否定し、拷問を受ける。白状をせずとも責め殺す覚悟を正連が示したとき、侍は正連を国の重宝と認めて己の犯行と告げた後、息を引き取った。

橋の正連のように鋭い観察眼を持つ人物が登場し、事件の真相を暴くという要素は、本作の他の章段にもみられる。これをいち早く指摘したのは、浮橋康彦氏「新可笑記の構成」⁽¹⁰⁾であった。浮橋氏は巻一の一、一の一、五の二、二の六、三の二、四の二、五の一について取り上げ、「一人の眼力するどき人物が、隠された事実を暴露する話が非常に多い」とし、『新可笑記』の特色の一つであり、『桜陰比事』の先蹤であると同時に、西鶴の人間観の一面を表わすものである」と述べている。

これは『新可笑記』における創作意識を考察する上で、重要な指摘であると思われる。何故ならば、この〈眼〉の

働きに関する章段は指摘がなされた例以外にも数多く存在し、〈眼〉の働きは物語中で重要な役割を果たしているためである。本稿では、『新可笑記』における〈眼〉の機能を明らかにし、西鶴の創作意識について考察を行う。

一、〈眼〉の効力が発揮される例

『新可笑記』には〈眼〉の効力が発揮される例が多数存在する。まずは、物事の真偽や正体を見破る〈眼〉が描かれた章段を確認していきたい。

前述したように巻一の一「理非の命勝負」は、大勢の侍から盗人を探し当て、「人の鑑」と称された橘の正連が登場する。巻二の三「胸をすへし連判の座」では、関ヶ原の陣で武芸を励み、鎧で六、七人を突き止めたことで「軍中には是をほめける」と称賛された小男が登場する。小男は敵方の老人を若年の時の筆道の師匠と見取って攻撃しなかつたことから、「をのく手を拍て、一戦のせはしき時節に、眼の正しき事を感じける」と周囲の者に感嘆された。

巻二の四「兵法の奥は宮城野」の「一流の達人」と称された剣術の師匠は、「兵法の極意にて何にても見えぬといふ事なく」という人物であり、盗みの芸のタイミングを見事見破ってみせた。

巻三の一「女敵に身替り狐」の母衣大将の何がしは、問男から妻への手紙を見て、筆跡は知らないながらも文章の特徴から歌学に詳しい人物であると推理し、代筆者に辿り着く。そして問男を切り捨て、その家は長く栄えた。

巻四の一「舟路の難義」には「物ごとに工夫ふかき人」が登場する。狂乱した娘の状態を見て「此病性医術にはかなはじ。某がし存するむねあり」と述べ、娘の狂乱にあわせて自らも狂乱して会話を可能にし、亡母の口寄せを行わせることを提案するなど適切な対処を行った結果、娘の狂乱は治った。

卷四の二「歌の姿の美女二人」における信玄公は、二人に分身した女性の怪異に対して狸の仕業と見破ったことから「信玄の御眼力、誠に以て名大将なりと、万人是のみならずかんじける」と周囲に称賛される。

卷四の五「両方一度に神おろし」には神路山の奉行が登場する。殺人事件の二人の容疑者に神文を書かせることで、その筆跡によって犯人を見極めて「発明天の理にかなひ、善悪二人の穿鑿落着」に至った。

卷五の一「罫を引鼠のゆくゑ」の家老は奉公を望む侍達の鼠に化ける術を見破り、「諸人かんじ」いった。

卷五の五「心を切たる小刀屏風」では大横目の何がしが、主人を守るため犯人と偽った小者団八の無実を明らかにする。

また、〈眼〉は人物や物事の観察を通してそれらの将来を見通す事も可能とする。卷一の二「ひとつの巻物両家有家老は二人の浪人がお互いを刺殺して死ぬと予測し、家にあつて欲しいものは「良き家老」だと評されている。卷二の一「炭焼も火宅の合点」の「天性の分限」は、息子と娘の性格を把握し、入牢した長男助命の成否を予測した、「徳に、入道を、まもる」人物であった。

さらに、商人の息子の余命を言い当てる卷二の六「魂よばひ百日の楽しみ」の「めいよの陰陽師」。三人兄弟の適性に合った職業を選択した卷四の四「書置の思案箱」の「武家随一の人」。卷五の二「見れば正銘にあらざ」には二人の家老が家中に存在することがやがて不和になり問題を起すことを予測する「天性よき侍」や浪人の襲撃を讀んで振り返りにした「家中一の目利者」が登場する。

以上、十四章段を挙げた。西鶴作の他の浮世草子にも〈眼〉の効力が発揮される例は見られる。しかし、これほど一つの作品に纏まって現れるのは後述する『本朝桜陰比事』を除けば『新可笑記』のみの特徴である。また、〈眼〉の効力を発揮する人物は傍点部のように、概ね賞賛の対象、もしくは優れた存在として描かれる。つまり、優れた人

物は優れた〈眼〉を持つのである。ここで注目したいのは、『新可笑記』にはこれまでの例とは正反対のもの―〈眼〉の効力が発揮されない例も同様に描かれることである。

二、〈眼〉の効力が発揮されない例

〈眼〉の効力を発揮されない例とはどのようなものだろうか。たとえば、卷二の一「炭焼は火宅の合点」に登場する我が子可愛さから「おろ、かにして」と評される母親は、父親とは反対に子供達の適性を見抜けず、結果的に次男を死なせてしまう選択をしてしまう。また、卷二の二「官女に人のしらぬ灸所」では「御政道たゞ、しからざる故」に天変地異を引き起こした武烈王が、亡き妃の木造を作った仏師が手違いから胸に墨を落としたのを灸の跡と見て、妃との不貞と勘違いし、仏師を捕縛する。卷二の四「兵法の奥は宮城野」では古い師匠の稽古に「退屈」した未熟な兵法の弟子達が古い師匠と新しい師匠の善し悪しを判断できず皆新しい師匠のもとに行ってしまう。卷四の二「歌の姿の美女二人」では「無分別」な神職が、神主の養子の症状を離魂ではなく狐狸の仕業と見誤り、弓で射貫いたことにより養子が死亡してしまう。

〈眼〉の効力を発揮したのが優れた人物であったのに対し、〈眼〉の効力を発揮できない人物は傍点部のように能力が劣っていると、ここまでの例では言えるだろう。〈眼〉とそれを持つ物の能力の有無には深い関わりがあるように一見思われる。しかし、〈眼〉の効力を発揮できないのは劣った人物だけではなく、優れた能力を持つ人物も含まれているのである。

例えば、卷一の四「生肝は妙薬のよし」に登場する母親は「女の鑑」と称される程貞淑な人物であったが、生肝を

取られた娘の遺体を発見した際、娘は容貌の美しさのために殺害されたと誤認する。母親には娘の美しさに強い愛着を抱く描写がなされており、それゆえに殺害理由を誤認したと考えられる。巻四の一「舟路の難義」に登場する代官は「勘定に発明なる人」であったが、遊女遊びにのめり込み、妻の従順な態度に油断した結果、遊里にまで同伴していた妻の臨月を見て取れずに死亡させてしまう。⁽¹¹⁾ 巻五の五「心の切たる小刀屏風」の団八は、前半部での義理堅い行動や酒屋を繁盛させるといふ優れた手腕を持つにもかかわらず、病床では「浮世の欲」にとらわれて娘に財産を残すという妻の求めに応じなかった。病状が回復した後、妻は家を出ていく。団七は「立腹」して「やがて思い知るべき女心」と考えていたが、予想と反して三年後も髪を下ろして暮らす妻に感涙し、多額の遺産を残した。団七は妻の本質を見抜けなかったのである。

また、一度は〈眼〉の効力を発揮したにもかかわらず、二度目は発揮できなかった例もある。巻五の二「見れば正銘にあらず」の目利き者は、同席していた侍が凶行に及ぶことを見て取り、返り討ちにできた。しかし、国替えをし、経済的に豊かになるとそれまでの「用心」を解いて「油断」をしてしまい、側に置いていた小坊主が侍の息子の変装と見破れずに首を討たれる。⁽¹²⁾

これらの例は、いずれも愛着や油断、立腹が原因となって〈眼〉の効力を発揮できなくなっていることに注目したい。ここで改めて他の例を確認してみたい。前述した巻二の一の母親は我が子を思う親心が〈眼〉を曇らせている。同様に、巻五の四でも娘の両親が盗賊の婿の変装に、「邪なる人共しらず、渡世の心やすきは都より東も住みよかるべし」と騙されてしまい、娘の将来を思う親心から盗賊に嫁がせてしまう。巻二の二の武烈王は妃への愛執から、巻二の四の兵法の弟子達は退屈から、そして、巻四の五では、殺人犯の搜索の際、「東国の道中にくらし、無分別なる眼ざし」と人々が偏見から犯人を誤認してしまう。

このように、〈眼〉の効力が發揮されない例は『新可笑記』中に九例存在するが、巻四の二の「無分別」を除く八例が人の心の動きを原因として注目される。巻一の「理非の命勝負」にて橘の正連は人相見について次のように言う。

眼は神明の宅にして明鏡のごとし。胸中に邪あらば瞳子正しからず。心爰にあらざれば見れ共みへざるにはあらずや。貴方の悪を掩ふといふ共、其罪いづくに遁れんや。

心が集中していなければ正しく見ることができない——これまで挙げた〈眼〉の例に当てはまるではないか。作品冒頭の巻一の一に〈眼〉に関する言葉が語られていることに注目せねばならない。また、この箇所はすでに諸注で指摘されている通り『孟子』や『大学』の言葉をほぼそのまま引用したものであり、このような物事の本質を見抜けるか否かという問題意識は西鶴独自のものではなく、当時の人々の人間観として一般的であったと思われる。

次に引用する『可笑記』巻一の三十六、そして『可笑記評判』（万治三年二月刊）巻十第卅八「諸侍を目利すへき事」にも次のように説かれている。

『可笑記』巻一の三十六

又、正理正道にいたり、本心あきらかなる人の心ハ、とぎたてたる、かゝミのことし、万の物を、うつしてミるに、善悪邪正ミぢんも、かくれなし、かくれなくんば、万の善正をえらび用、もつち邪悪の万事を、すつべき事、何のうたがひあらんや

又、邪理悪道におぼれ、本心くらき人の心ハ、くもりたる鏡のごとく、万の物をうつして、ミるにも、みえず、見えずんば、いかでか、善悪邪正あきらかならんや、あきらかならずハ、まつたく、善正を、えらひする事有べからず。さあらバ、一生、妄想^{もうさう}妄念^{ねん}の惡逆^{あくぎやく}不道^{ぶたう}の、我ま、のミ取おこなふ⁽¹³⁾へし

『可笑記評判』卷十第卅八「諸侍を目利すへき事」

君子の心ハ鏡のごとし、此故に、よく人の善悪をミる、といへり

人を目利せんハ、まづ、こなたの心、いかにも、清潔ならざれば、善悪たしかに、ミるへからず、それも、只一往にしてハ、しるへからず、よく、したしみ馴て、その物いひと行跡とを、見き、ぬれば、いかに、つくるひたしなむとも、どこぞにて、妖のあらハる、物なり

しかれば、よく目利すると云ハ、器量あると、なきと、邪と正と、慢ずる者、をこるもの、重欲の者、みな、よく見分へし（中略）それも、目利する人、をのれが依怙⁽¹⁴⁾ひるきの目より見るならば、善も悪も、更に、ミゆべからず

右の『可笑記』の例は直接〈眼〉に関するものではないが、心の正しい者には物事を正しく知ることができ、心の正しくない者は正しく知ることができないと説いている。『可笑記評判』の例は人の善悪を目利するという内容であり、自身の心が善悪の判断に影響を与えると述べている。『新可笑記』の例もこれらの論理から外れることはない。ただし、『新可笑記』は何故、もしくはどのような「邪理悪道におぼれ」てしまったのか、具体的に描写を行っている。そして、特に心の正しい者も正しくなくなる時が訪れる、つまり人の心の変動を描く点にも注目すべきである。

三、〈眼〉に関するその他の例

『新可笑記』にはその他にも〈眼〉に関する例が見られる。例えば、〈眼〉の作用を阻害しようとする行為——つまり変装である。巻一の一四「生肝は妙薬のよし」の武士は僧侶に変装して、生肝を持つ標的の娘の家に入り込んだ。巻三の二「国の掟はちえの海山」の仕置者も僧侶に変装して身分を明かさず国中を監察する。また、巻五の一「鎧を引鼠のゆくゑ」の忍びの者達は鼠に変身し、巻五の四「腹からの女追剝」の盗賊は大尽に変装して都の娘を娶り、その娘達もまた「男のすなる夜のかたち」と変装して強盗を行うようになった。いずれも己の正体を隠し、偽りの姿を見せて相手の〈眼〉を騙そうとしている。

巻三の一「女敵に身替り狐」も〈眼〉を騙す物語である。妻が不貞しているという噂が流れた際、侍は狐の死骸を用意して芝居を打ち、来客に見せることで狐の仕業とする。ここでは妻の不貞という噂を狐の怪異という偽りの事件に視覚化し、世間の〈眼〉を欺いている。

同じく偽りをもって〈眼〉を欺く例としては、巻五の五「心の切たる小刀屏風」が挙げられる。ここでは小柄が紛失し、主の小姓が疑われるやいなや、即座に逃走して小姓の疑いを逸らそうとする小者の団八が登場する。

巻二の三「胸をすへし連判の座」にも〈眼〉の働きを阻害しようとする描写が見られる。訴訟の連判三十八人分を円形に書くことにより、誰が発起人かわからず、墨のかすりや薄さを見て判断しようとするも失敗するという内容である。

さらに、巻五の三「乞食も米に成男」では、友人の紹介で仕官が叶った浪人田川が「其が事、御前へ非人の境界を

申あげられずや。然らば此まゝにて御前へ」と、友人の諫言も聞かず、それまでの破れ薦を身に纏って御前に御目見得している。これは田川による種の変装ともいうべきであり、外見にとらわれない御前の〈眼〉の確かさを田川が試したのである。その後、無事仕官した田川は能力を発揮し、家の重宝となった。

卷三の三「掘どもつきぬ仏石」の例を見てみたい。御咄の衆に混じっていた男が自然石は金輪際まで生え抜けている、雄の三毛猫は居ないと言い出したため、越後の大将は国の費えもかまわず自然石の根本を掘らせ続け、雄の三毛猫を探させるという内容である。「しからば掘せて見るべし」とあるように、越後の大将は男の言葉の真偽を己の〈眼〉で確かめようとしている。また、冒頭部で大将は切った爪をわざと一つ隠し、数を数えて足りないと言う者がいるか試した。このことから大将は物事をきちんと〈眼〉で確認することを他者にも求めていることがわかる。このような性格の持ち主であったからこそ、男の言葉の真偽をその〈眼〉で確かめずにいられたのである。

以上のように、『新可笑記』には〈眼〉が重要なモチーフとして利用された章段が存在する。(本稿末尾に表を付した。)

四、『本朝桜陰比事』との比較

このように、『新可笑記』には〈眼〉に関する物語が数多く収録されている。しかし、数の問題で言えば『新可笑記』の約二ヶ月後に刊行された、同じ西鶴作の浮世草子『本朝桜陰比事』(元禄二年正月刊)は、全編にわたって〈眼〉の鋭さを扱う作品であることを考慮せねばならない。

『本朝桜陰比事』は京都の奉行が難事件を次々と解決に導くという裁判をめぐる短編集である。先行研究において

は、『新可笑記』に裁判や推理の場面が多いことから『本朝桜陰比事』との関連性が指摘されてきた。暉峻康隆氏は『新可笑記』について「作者にとつても、また文學史的にみても、なんらプラスするところのない作品といはざるをえないのである。強いて存在意義を求むれば、翌元禄二年正月刊の「本朝櫻陰比事」の母胎である、といふ點であらう。」⁽¹⁵⁾と述べている。浮橋康彦氏も「一人の眼力するどき人物が、隠された事実を暴露する話が非常に多い」とし、『新可笑記』の特色の一つであり、『桜陰比事』の先蹤であると同時に、西鶴の人間観の一面を表わすものである」としており、『新可笑記』は『本朝桜陰比事』のさきがけとして評価がなされる傾向にあった。

たしかに『新可笑記』に『本朝桜陰比事』に通じる要素が含まれているのは否めない。だが、同じく裁判や推理を扱っているとしても、その関心や描写方法に至るまで同じといえるのだろうか。『本朝桜陰比事』では全編にわたって裁判・推理がおこなわれており、奉行の鋭い〈眼〉によって事件の真相が暴かれる。ここで、『新可笑記』と『本朝桜陰比事』に描かれる〈眼〉の働きを比較し、その性格の違いを明らかにしたい。

まず、全四十四話中、御前の裁きについて評価するものは五例あり、その中で事件を見抜いたことに関するものは、巻一の三「御前には即座にきこし分させらるゝ事、諸人かんじける」、巻二の四「御見通しの御眼力を感じけると也」、巻三の七「御推量のたがはざる所を感じける」の三例のみである。巻二の四に「御眼力」とあるのは注目されるもの、⁽¹⁷⁾その数は〈眼〉の確かさが優れた人物を示す『新可笑記』と比べて意外にも少ないのである。それは、『本朝桜陰比事』の構成が、〈眼〉の鋭い御前が一人で事件を解決していくものであり、御前が優秀であるのは自明であるからという理由であるかもしれない。

また、『本朝桜陰比事』には『新可笑記』と同じく〈物事の真偽や正体を見破る〈眼〉〉の力が全編にわたって発揮されるが、『新可笑記』に散見された〈人物や物事の将来を見通す〈眼〉〉については描かれていない。これは『本朝

『桜陰比事』が全て裁判を扱っており、前者の機能しか発揮されなかったためである。また、〈眼〉の効力を発揮できない例は巻二の四「落し手有拾ひ手有」において名代の家老が判決を誤る一例のみである。つまり、『新可笑記』の方がより多様な〈眼〉の働きについて触れているのである。

このように、『新可笑記』と『本朝桜陰比事』は同じく〈眼〉の働きを扱った作品であるが、その内容は異なっている。その理由は、『本朝桜陰比事』が〈眼〉の鋭い人物が事件をどのように解決へと導くかを扱った作品であるのに対し、『新可笑記』がどのような人物がどのように〈眼〉を発揮するが否かに関心が向けられた作品であることに求められるだろう。二つの作品の創作意識の違いがここには表れているのである。

五、『新可笑記』における虚実

では、何故『新可笑記』には〈眼〉の問題を扱った章段が多いのだろうか。この問題を考えるためには、『新可笑記』の特徴について確認する必要がある。『新可笑記』執筆当時の西鶴の態度について、富士昭雄氏は次のように指摘している。

西鶴は本書の序文で「人は虚実の人物」と述べているが、本書刊行の前年の『懐硯』では「まことに心は善悪二つの人物ぞかし」（四の二）と述べ、また本書と同年刊行の『永代蔵』では、「人は実あつて偽りおほし」（一の二）と類似の発言をしている。すなわち、本書執筆のころは、人の虚実、善悪二心のあり方に着目し、これを洞察描写しようとする態度がみられる。⁽¹⁸⁾

富士氏は『新可笑記』が人の心について虚実や善悪を洞察描写しているとした。実際に巻三の五では都の困窮した状況下の人々について「人の心、虚になつて実をうしなひ」と心の虚実を描写している。しかし、この「虚実」の概念は物語中で起こる事件や出来事―物語の構成にも用いられているのではないだろうか。

たとえば、冒頭の巻一の一では、犯罪者を見抜く力を持つ橘の正連と犯人とされた武士の二人が、裁判の場でお互いの証言の正しさに命をかけ、真偽を決する。これは、『本物（実）』と『偽物（虚）』の二人の人間に焦点が当てられる章段である。

本物と偽物というモチーフは巻一の一以外にも『新可笑記』に散見される。巻四の五「両方一度に神おろし」も巻一の一と同じく無実の侍と犯人の侍が登場する。巻一の四「生肝は妙薬のよし」では少女の生肝をとるために偽物の僧侶に変装した侍が、結末では道心堅固な本物の僧侶になる。巻一の五「先例の命乞」には大工という本業をないがしろにし、訴状書きという虚像を追い求めた男が登場する。巻二の三「胸をすへし連判の座」では武勇に優れた小男と拾い首をした侍との手柄の真偽が描かれ、本物（小男）が偽物（拾い首をした侍）に破れる展開となっている。巻三の一「女がたきに身替り狐」は、妻の不貞という真実を狐の怪異という偽りで覆い隠す話である。巻三の三「掘りどもつきぬ俄年寄」は前述したように、越後の大將が正直な男の話の虚実を見極めようとする内容となっている。また、本物を偽物で隠そうとする行為、前述した変装については巻一の四「生肝は妙薬のよし」、巻三の二「国の掟はちえの海山」、巻五の一「鐘を引鼠のゆくゑ」、巻五の四「腹からの女追剝」が該当する。

〈眼〉の問題について論じた際に挙げた変装について触れたが、本物と偽物というモチーフが〈眼〉にかかわるのは変装だけではない。〈眼〉の力が発揮される例、すなわち優れた者が持つ〈眼〉は物事の本質（本物）を明らかにし、〈眼〉の力が発揮されない例、すなわち心に何らかの乱れを持つ者の〈眼〉は偽り（偽物）に騙されてしまうの

である。このように〈眼〉と本物・偽物というモチーフは密接に結びついているといえる。

実は、『新可笑記』本文だけではなく、序文にも〈眼〉と虚実との関係が窺える。次に序文を引用する。

笑ふにふたつ有。人は虚実の入物。明くれ世間の慰み草を集めて詠めし中に、むかし淀の川水を硯に移して、人の見るために道理を書つつけ、是を可笑記として残されし。誰かわらふへき物にはあらず。此題号をかりて新たに笑わるる合点。我から腹をかかへて、智恵袋のちいさき事、うまれつきて是非なし。

この序文は本文中にも『可笑記』とあり、題名の『新可笑記』がそれをもとにしてしていると表明している。また、それだけではなく、文章の内容も『可笑記』の序文を意識していることも先行研究によって指摘されている。⁽¹⁹⁾ 序文には「此題号」すなわち『可笑記』の名を借りて「新たに笑わるる合点」とされるのが『新可笑記』であるが、では、まず『可笑記』の「笑い」とはどのようなものなのだろうか。『可笑記』の批評を行った書である浅井了意の『可笑記評判』では、書名について、同時代人の了意が次のように述べている。

この書の名を可笑記といふ事は、みづから卑下のこと葉なり（中略）達人は、さだめて、この書を見て、わらふべきことを、兼て卑下をいたしけり。⁽²⁰⁾

この了意の言葉や『可笑記』の序文もあわせて鑑みると、『可笑記』の「笑い」とは、面白さからの笑いではなく、無知な者に対する嘲笑としての笑いであることがわかる。

次は『新可笑記』序文の「笑ふにふたつ有。人は虚実の人物」について考えていきたい。この一文は先行研究では様々な解釈がなされてきた。例えば、富士昭雄氏は「笑うにも二つの笑い方がある。そらぞらしく笑う者もあれば、心から笑う者もある」⁽²¹⁾とし、「虚の笑い（作り笑い）実の笑いの二つがある」と解釈した。また、広嶋進氏は「笑うにも二通りの笑いがある。嘘（うそ）の笑いの実（まこと）の笑いである」⁽²²⁾とする。これらは、「笑ふ」を実際の行為としてとらえ、続く「人は虚実の人物」と関連させて解釈を行っている。

それにしても、「笑ふにふたつ有」とは謎めいた一文である。篠原進氏が「文中には笑いの具体的内容を示す部分⁽²³⁾が、すっぽりと抜け落ちている」と指摘したように、この「笑ふ」が何に対しての笑いなのか、明らかではない。しかし、西島孜哉氏は次のように指摘する。

序文の書き出しに「笑ふにふたつ有」とある。一つは『可笑記』の「笑い」であり、一つは自分がこれから書く「新たに笑わる、合点、我から腹をか、へて」笑われる『新可笑記』の「笑い」である。（中略）二つの笑いを虚実の二様とするのは妥当であろうか。そのような捉え方が正しいとしても、むしろ西鶴は『可笑記』を笑とし、自己の書を虚と位置づけていたと考えねばならない。西鶴は自己を貶める姿勢を強調するが、その西鶴が『可笑記』を虚とし、自己の書を笑とする自信に満ちた認識をもっていたとは考えられないのである。なによりも「人は虚実の人物」とは、笑いに二様あるように、人の心にも二様あることをいうにすぎず、笑いの虚実をいうのではない。この時期の西鶴は、

まことに心は善悪二つの人物ぞかし（『懐硯』卷四の一）

人は実あつて偽りおほし（『日本永代蔵』卷一の一）

などと、人の虚実、善悪に注目している。その人間の二面性に対して、『可笑記』は「道理を書つづけ」たのである。その道理は正しく笑うべきものではないが、自己の書は「智恵袋のちいさき」ゆえに、『可笑記』のように正しき道理が述べられなかった。それは笑うべきものであるといっているのである。⁽²⁴⁾

西島氏は「笑ふ」の「ふたつ」を後述の「誰かわらうへき（つまり『可笑記』）」と「新たに笑わるる（つまり『新可笑記』）」と捉える見方をしており、特に注目すべきは『笑い』と「虚実」を切り離していることである。稿者も同じく「笑ふにふたつ有」の「笑ふ」と実際の行為としての「笑ふ」を切り離して解釈すべきと考える。しかしこの一文はより単純に捉えてもよいのではないか。

『可笑記』とは読み下すと「笑ふ可き記」であり、『新可笑記』とは「新たに笑ふ可き記」である。つまり、「笑ふにふたつ有」は「笑ふ可き記」といわれている書に二つあるという意味であり、『可笑記』と『新可笑記』との二つの作品自体を指しているのではないのだろうか。「明くれ世間の」以降は『可笑記』と『新可笑記』との成立についての内容であり、「誰かわらふへき」『可笑記』と「新たに笑わるる」『新可笑記』という比較がなされている。つまり、序文では冒頭から一貫して『可笑記』対『新可笑記』という構図が読者に対して明確に示されているのである。

「笑ふにふたつ有」に続いては「人は虚実の人物」とあり、「実」と「虚」という対になった概念が登場する。その後、内容は『可笑記』と『新可笑記』の比較がなされていくが、さらに、「道理をかきつづけ」られる程に智恵の豊富だった『可笑記』の作者如備子と、『新可笑記』の作者である「智恵袋のちいさき」我、すなわち西鶴という二人の作者も対比されて示されている。「人は虚実の人物」の「人」とは「笑ふにふたつ有」が二つの作品を示していたように、二人の「人」、作者を示しているのではないだろうか。「人は虚実の人物」であるから、人によって「実」が

入ったり、「虚」が入ったりする。『可笑記』というオリジナルを著した如儡子が《実》の作者であれば、『可笑記』も《実》の作品となる。一方、『可笑記』の題号を「かりて」作られた『新可笑記』は偽物つまり《虚》の作品となり、如儡子に「智慧」の及ばない「我」（西鶴）も《虚》の作者であると捉えられる。

このように、序文は「虚実」の対比的構造をなしている。序文は単なる謙辞に留まらず、同じく「虚実」が繰り返し描かれる本文への導入としての役割を持っているのである。

また、序文では『可笑記』と『新可笑記』という二つの「笑ふ可き記」が挙げられ、末文には「此題号をかりて新たに笑わるる合点。我から腹をかかへて、智恵袋のちいさき事、うまれつきて是非なし。」とあることから、二作品の比較が行われていることがわかる。特に「我から腹をかかへて」という一文は、この二作品を作者自身で見比べてみても（自分の知恵袋の小ささに）腹を抱えて笑うという内容であるが、その裏にはいわんや読者が見比べればなおさらであるという意を読み取ることができるといえる。つまり、序文は読者の〈眼〉で二作品が比較されることを前提としているのである。さらに、序文という性格上、この文章は本文を見る前に目にする。読者は序文が述べる『可笑記』との違いについて、自分の〈眼〉で確かめながら『新可笑記』を読んでいくこととなる。そして、本文には〈眼〉の働きが数多く描かれているが、本文中の登場人物だけではなく、読者にも〈眼〉を働かせるという入れ子型の構造をとっている。これは西鶴の施した仕掛けであり、『新可笑記』の巧みさであるといえよう。

では、何故『新可笑記』には〈眼〉の問題を扱った章段が多いのだろうか。この時期の西鶴は、「まことに心は善悪二つの人物ぞかし（『懐硯』巻四の一）」「人は実あつて偽りおほし（『日本永代蔵』巻一の一）」「人は虚実の人物（『新可笑記』序）」など、虚実や善悪という二項対立で人心を捉えようとしていた。虚実や善悪を判断するために人や物事を捉えて情報を集める最も重要な器官は、〈眼〉である。虚実や善悪を捉えようとした西鶴の関心が、〈眼〉の

働き自体にも向けられるのは自然なことであつたのではないか。その〈眼〉への関心が事件の解決に向けられたのが『本朝桜陰比事』であつた。

一方『新可笑記』はどうだろうか。『新可笑記』中には物事を正しく捉えられる者もいれば捉えられずに騙される者もいる。何故なら、〈眼〉の機能はその人物の心の動きによって左右されるといふ不安定なものであるからだ。『新可笑記』は〈眼〉の不安定さを描くとともに、どのような人物なら〈眼〉の効力を発揮できるか否かについて描写する。特に、〈眼〉の効力を発揮できない例については、その原因となる心の動きが描かれており、西鶴の人間観を示す興味深い例となっている。

実は、〈眼〉に関する内容は『可笑記』にも確認できる。

『可笑記』巻三の四一

それ、よき主君と申ハ、仁義をさきとして、おごる事なく、文をこのミ、武をもつはらとし、ゐんらんをつ、しミ、欲すくなく、それくくに、よき人を目利し、似合くの役を、おほせ付られ、⁽²⁵⁾

『可笑記』巻五の八一

いづれの御家の老出頭人も、諸侍善悪の目利ハ、大切なる事なるべし⁽²⁶⁾

『可笑記』には「目利」という語が用いられる章段は八章段見られるが、いずれも人物（侍）に対する目利であり、その行為の主体は主君や老出頭人といった武士の中でも上位の階級の者に限定されている。また、善い人物を目利し

て採用することの重要性を繰り返し説き、それを善い主君の条件と見なしている。つまり、『可笑記』における〈眼〉は人物の判断を行うための重要な器官として描かれているものの、善い侍を選ぶという限定した条件下でのみ価値を発揮するものでしかなかった。

一方、『新可笑記』では〈眼〉を働かせる対象は人物に関しては侍に限らず、また事物も含まれている。〈眼〉を働かせる主体も神道の行者から町人、家老までという幅広い階級にわたっている。『可笑記』と『新可笑記』の両者を比較すると、『可笑記』では単なる手段でしかなかった〈眼〉であるが、『新可笑記』では〈眼〉の働きの主体である人物の評価や心の変化などと関連づけられており、西鶴の〈眼〉に関する関心の広さが際立つのである。

おわりに

本稿では〈眼〉の機能に着目することにより、『新可笑記』の再評価を試みた。『新可笑記』の全ての章段において〈眼〉の働きが描かれているわけではなく、〈眼〉は『武道伝来記』の「敵討」や『武家義理物語』の「義理」といった明確な素材とはレベルの異なるものでしかない。

しかし、冒頭でも引用したように、『新可笑記』が他作品に収録されなかった話の寄せ集めの作品集であるということについては、否定できるだろう。二十六章段中二十章段にわたって〈眼〉の働きが描かれる章段が纏まっているのは、他作品からの寄せ集めとすれば不自然であり、そこには明らかな編集意図が存在したと捉えるのが自然であるからだ。

『新可笑記』には西鶴の〈眼〉への強い関心を読み取ることができる。『新可笑記』が低評価である理由の一つに

表 『新可笑記』における〈眼〉の機能について

	章題	本質を把握できる	本質を把握できない	変装	その他
1-1	理非の命勝負	○			
1-2	ひとつの巻物両家に有	○			
1-3	木末に驚く猿の執心				
1-4	生肝は妙薬のよし		○	○	
1-5	先例の命乞				
2-1	炭焼きも火宅の合点	○	○		
2-2	官女に人の知らぬ灸所		○		
2-3	胸をすへし連判の座	○			○
2-4	兵法の奥は宮城野	○	○		
2-5	死出の旅行約束の馬				
2-6	魂呼ばひ百の楽しみ	○			
3-1	女がたきに身替り狐	○			○
3-2	国の掟はちえの海山			○	
3-3	掘どもつきぬ仏石				○
3-4	中にぶらりと俄年寄				
3-5	取りやりなしに天下徳政				
4-1	舟路の難義	○	○		
4-2	歌の姿の美女二人	○	○		
4-3	市にまぎるゝ武士				
4-4	書置の思案箱	○			
4-5	両方一度に神おろし	○	○		
5-1	鑓を引鼠のゆくゑ	○		○	
5-2	見れば正銘にあらず	○	○	○	
5-3	乞食も米に成男				○
5-4	腹からの女追ひはぎ		○	○	
5-5	心の切れたる小刀屏風	○	○		○

(なお、〈眼〉の利用がなされていない章段は二十六章段中六章段存在する。)

「登場する人間の内部に全然タッチしてゐない」⁽²⁷⁾との批判があるが、〈眼〉を持っていることはその反証の一つとなるだろう。を待つ者の心の有り様にも関心が向けられ

〔注〕

- (1) 金井寅之助「新可笑記」の版下『西鶴考 作品・書誌』八木書店、一九八九年（初出は『ブリア』二十八号、天理図書館、一九六四年八月）
- (2) 谷脇理史「新可笑記」項（『日本古典文学大辞典第三卷』岩波書店、一九八四年）収録。
- (3) 注1を参照。
- (4) 暉峻康隆「新可笑記」と「本朝桜陰比事」『西鶴評論と研究下』中央公論社、一九五三年
- (5) 杉本好伸「新可笑記」の作品構成―各章間における相互関連の検証を中心に―『鯉城往来』第2号、広島近世文学研究会、一九九九年一〇月
- (6) 「新可笑記」作品構成補遺致（『安田女子大学紀要』第二十八号、二〇〇〇年二月）、「新可笑記」ノート―成立過程解明に向けての一階梯として―（『国語国文論集』第三十号、安田女子大学日本文学会、二〇〇〇年一二月）
- (7) 杉本好伸「新可笑記」ノート―成立過程解明に向けての一階梯として―（前掲）
- (8) 注5を参照。
- (9) 注2を参照。
- (10) 浮橋康彦「新可笑記の構成」森山重雄編『日本文学 始原から現代へ』笠間書院、一九七八年
- (11) 拙稿「執心」への対処をめぐる物語―「新可笑記」巻四の一「舟路の難義」考（『語文』第百・百一輯、大阪大学国語国文学会、二〇一三年一二月）を参照。
- (12) 拙稿「新可笑記」の描く「油断」―巻五の二「見れば正銘にあらざ」考―（『近世文藝』第九十九号、日本近世文学会、二〇一四年一月）を参照。
- (13) 朝倉治彦・深沢秋男編『仮名草子集成第十四巻』（東京堂出版、一九九三年）より引用。
- (14) 朝倉治彦・深沢秋男編『仮名草子集成第十六巻』（東京堂出版、一九九五年）より引用。
- (15) 注4を参照。

- (16) 注10を参照。
- (17) 「眼力」の語は西鶴浮世草子中『新可笑記』と『本朝桜陰比事』にのみ用いられる。
- (18) 麻生磯次・富士昭雄編『決定版対訳西鶴全集9』明治書院、一九九二年
- (19) 麻生磯次・富士昭雄編『決定版対訳西鶴全集9』（前掲）において、序文の「淀の川水」の注釈として、『可笑記』の序に、「たゞうき世の波にたゞよふ一瓢（べう）の、うきにういたる心にまかせ、よしあし難波入江のもしほ草かきあつべたる海士のすさみ」とある。」と指摘されている。
- (20) 朝倉治彦・深沢秋男編『仮名草子集成第十五卷』（東京堂出版、一九九四年）より引用。
- (21) 麻生磯次・富士昭雄編『決定版対訳西鶴全集9』明治書院、一九九二年
- (22) 富士昭雄・広嶋進校注訳、新編日本古典文学全集69『井原西鶴集④』、小学館、二〇〇〇年
- (23) 篠原進「二つの笑い―『新可笑記』と寓言―」『国語と国文学』第八十五号、東京大学国語国文学会、二〇〇八年六月
- (24) 西島孜哉『新可笑記』序論―武家物における位置―『武庫川国文』第五十号、武庫川女子大学国文学会、一九九七年十二月
- (25) 注13を参照。
- (26) 注13を参照。
- (27) 注4を参照。

※『新可笑記』の本文は『新編西鶴全集本文篇』（第三卷、勉誠出版、二〇〇三年）より引用した。

SUMMARY

The Function of the Eyes in Shinkashouki

Saori NAKA

This paper aims to examine Shinkashouki by Saikaku, focusing on the literary function of the eyes according to the varied descriptions found in the work. A particularly notable point is that the accuracy of the eyes is described as worsening with the changes of heart of their owner.

Shinkashouki is also compared with Honchououinhizi by Saikaku in view of the description of the function of the eyes, and a clue is found in the preface. A reassessment of Shinkashouki is carried out, bringing to light Saikaku's fascination with eyes and the intricacies of their depiction.